

第1回 全国救護活動研究会学術集会

国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟416室

教育講演(40分) 10:10~10:50 P12

明るく輝く少年消防クラブを目指して
講師：八橋 徳二郎（全国救護活動研究会）

特別講演(40分) 11:00~11:40 P14

メディカルラリー世界大会へ出場して
講師：鶴和 幹浩（指導医.com 代表）中村 富士美（国際山岳看護師）

休 憩（11:40~12:40）

第2回 NBC 担当者会議 特別講演(90分) 12:40~14:10 P16

「CBRNE テロ対策の現状と課題…大規模イベントを見据えて」
講師：濱田 昌彦（重松製作所主任研究員 元陸自化学学校副校長）

第2回 NBC 担当者会議 ディスカッション・質疑応答(20分) 14:10~14:30

座長：八橋 徳二郎（全国救護活動研究会）

一般発表1(60分) 14:40~15:40 P17

座 長：熊澤 光明（全国救護活動研究会）
発表者：久保居 俊之（南那須地区広域行政事務組合消防本部）
日下 あかり（鳥根大学医学部附属病院）
高野 悟志（長岡市消防本部）

一般発表2(60分) 15:50~16:50 P20

座 長：吉岡 利征（全国救護活動研究会）
発表者：小島 大輔（印西地区消防組合）
長橋 義志（CSRM アドバンスドガイドプロジェクト）
小林 靖典（浜川広域消防本部）

明るく輝く少年消防クラブを目指して

特定非営利活動法人全国救護活動研究会 代表

八柳 徳二郎

日本における少年消防クラブは、昭和 25 年に総務省消防庁(当時国家消防庁)の通知によって全国的に始まりました。現在では全国で 40 万人を超える少年消防クラブ員が活動しており、全国的に少年少女の健全な育成及び教育の一翼を担っています。少年消防クラブに関する現状分析やアンケートなどが「少年消防クラブの充実強化に関する検討会(総務省消防庁)」により実施され、報告書も出されました。今回は具体的な活動内容ではなく、検討会報告書でも指摘されていた「指導者の育成方法の充実」に関する内容について、全国救護活動研究会で積み上げてきた経験からなるノウハウや小学校の教員の方々と研究した内容について紹介します。現在の消防署の新人教育でも活用できる内容となっていることから、少年消防クラブ員の教育目的だけでなく、広く新人教育方法として紹介します。

少年消防クラブ員は小学生から高校生まで幅広く所属しており、指導員を含むすべての世代が少年消防クラブに関わっています。ここで「明るく輝く」という言葉を念頭に掲げ、指導方法の根幹と言える「どのような言葉を伝えるか。」という内容に的を絞り、解説します。皆さんに想像していただきたい画像があります。丸が二つ書かれていて、一つはきれいな丸、もう一つは視力検査で使われるような一部が欠けた丸です。この並んだ二つの丸を見て、どこが気になりますか。私はどうしても「欠けている部分」に目がいってしまいます。この話は多くの書物などにも書かれていますが、人は「きれいな丸」よりも「欠けている部分」に注意がいくってしまうということを意味しています。

それでは視点を変えて、どのような指導により「明るく輝く」ことができるか、ということを考えてと思います。どのような指導を受けるとその場が明るくなるかを考えると、やはり、努力を認められた時や成功を褒められた時ではないでしょうか。このような話をすると指導は褒めてばかりではダメ、厳しさが必要、と声が聞こえてきそうです。そのとおりかもしれませんが、根本的な人の心の動きについて考えてみましょう。人は認められる(褒められる)とうれしくなって、元気が出て、やる気が出て、次のことを努力したくなります。ですので、また褒められる環境がやってくるのです。逆に努力を認められない(怒られる)と悲しくなり、元気がなくなり、やる気なくなり、次のことを努力したくなくなるのです。そうするとまた、注意を受けたり、怒られたりするのです。そうするとまた、やる気がなくなっていく、という具合に悪化していきます。「明るく輝く」という言葉を目的としたとき、この「やる気が出て、明るくなる環境」を使わない手はありません。ここで重要なポイントは、褒めてばかりでいい、常に認めてあげればよい、ということではなく、認めて、時には褒めて、やる気が出ているところで、欠けている部分を指摘するということです。やる気が出ている時に指摘すると人は、心の栄養が充てんされているので落ち込む前に乗り越えることができます。そうすると、その努力をまた認めてあげることができるのです。欠けている部分を指摘され、努力し、乗り越え、そのことを認めてもらえる。

この経験はとても大きな感動とともに「努力して何かを達成することは感動するほどうれ

しいものだ。」という意識づけになり、努力することに抵抗がなくなっていくます。社会人では、そうは言っても・・・と素直に吸収されないかもしれませんが、少年消防クラブの子供たちには大きな指導効果があります。話をまとめますと、認めの声掛けができるチャンスがあったら、しっかりと認めようということになります。

結論に近い話になってしまいますが、二つの丸を思い出してください。この時「きれいな丸が書かれていますね。素晴らしい。」という言葉を使うには、「欠けているところに気付いたとしても整っている丸の部分についてコメントしよう。」という強い意識を日常的にもっていただかなければならないのです。これが指導者の成功の秘訣と言えるかもしれません。

このように解説しても、やはり、「いやいや、間違いは指摘しないと！」と言われるかもしれません。講演では、サンドウィッチ指導についても紹介します。

ここまでは「明るく輝く」ために「どのような言葉を伝えるか」ということを解説しました。そこで、さらに視点を変え、小学生の指導に特化した指導法について紹介します。前述した声掛けに加え、どのように話をすると効率よく意味が伝わるのかということをお学校の教員の方々とまとめました。

今回は小学生に効率よく話を伝える方法を二つに大別してまとめました。1つが小学生に分かりやすく伝えるポイントです。これは3点あり、説明の構成におけるポイントです。2つ目が小学生に話をする時のポイントです。これは5点あり、具体的に説明をする際のポイントです。それぞれについて詳しく解説します。小学生にわかりやすく伝えるためには、以下の3点がポイントです。①「導入、説明、まとめに分けて説明する。」導入では、これから何をするのか？何のためにするのか？をはっきりと伝えます。最後にまとめで覚えてもらいたいポイントをしっかりと伝えます。②「導入で小学生が驚くような演出を盛り込む」例えば、応急手当の指導を行う際に、急に指導者が小学生

の後方で「痛い」と叫びながら倒れこむ、そこに前で話をしていた指導者が「大丈夫ですか」と駆け寄り、圧迫止血を行い、応急手当を行うといった演出です。③「説明では、分かりやすい演出演技をする。」これは、一般的にも指導は「やって見せてから」と言われていますが、その言葉のとおりです。わかりやすい演技を見せながら指導を行います。小学生たちは言葉で理解するよりも多くのことを目で見えて理解するのです。

次に小学生に話をするポイントは以下の5点です。①「大きな声で話す。」基本として、大きな声ではっきりと話さなければ伝わること伝わりません。②「身振り手振りをまじえてオーバーアクションで説明する。」聴覚だけではなく、視覚からも情報をしっかりと伝達します。③「小学生の知らない言葉はしっかり説明する。」言葉の意味がわからないと思考が止まり、次の文章が理解できなくなってしまいます。④「常に小学生へ問いかけて、小学生が飽きないようにする。」質問に回答することで何度も聞いたことを思い出し、記憶が定着します。⑤「小学生の答えや反応はできるだけ認めて否定しないようにする。」大人が想像もしない回答や反応があります。「違います」という表現は子供たちの反応を止めてしまいます。うまく受け流し、否定せずに正解を伝えます。

前段で解説した「明るく輝く」ために「どのような言葉を伝えるか」を意識して日常的に声掛けを行い、具体的に指導する時には、「わかりやすく伝えるポイント」と「話をする時のポイント」を一つ一つチェックして説明の構成を作ることにより、指導はとてもやりがいのある見える成果のものになると思います。

全国の明るく輝く少年消防クラブを目指して、皆様のご活躍を期待したいと思います。私たちは教員でもなく、指導の専門家ではありませんので困難もあると思いますが、ぜひ青少年の健全育成の一翼を担っているという誇りを胸にこれからも少年消防クラブ員の方々に指導していただきたいと思います。

メディカルラリー世界大会へ出場して

1) 指導医.com 代表 2) 国際山岳看護師

鶴和 幹浩¹⁾ 中村 富士美²⁾

チェコメディカルラリー Rallye Rejviz

チェコメディカルラリー「Rallye Rejviz」は、1997年にチェコ共和国で始まった、全世界で行われているメディカルラリーの起源とされている大会です。国境付近の街で開催されるのですが、始まりは各地区の「国が異なる救急隊」が、それぞれの技術ややり方をお互い見せ合うことで良いところを吸収して、救命率を上げること狙って始めたのだそうです。とても歴史のある、いわば、メディカルラリーのオリンピックと行っても過言ではない世界大会なのです。

私達は4名1チームの医師混合国際チーム部門に参加しました。メンバーは、救急専門医として活躍されている鶴和医師、日本にまだ7名しか認定されていない国際山岳看護師である中村看護師、そしてNPO法人全国救護活動研究会代表の八幡救命士、そして羽ばたきたくてウズウズしていた水野救命士の4名。そして、活動の全てを記録するために同行してくれた、黒田看護師。以上の5人で行動を共にしました。

チャレンジした症例は以下11想定。ラリーの実施時間は24時間耐久です。待機場所で待ち時間が来ると救急車で現場に向かいます。住宅あり、公園あり、道路上あり、森の中あり・・・夜中の山岳救助では真っ暗なのはもちろん、かなり冷え込み、過酷なものでした。そして、世界中から出場隊は集まっていますので共通言語は英語です。

出場順で想定の大略を説明します。

(講演では、現地で撮影した動画を中心に「Rallye Rejviz」の魅力をご紹介します。)

- 1 転院搬送事案での良質なCPR継続と本気の緊急走行。
- 2 認知症の悪化と思われる祖父と孫。両親は海外旅行で連絡とれず。病態判断した上で搬送するのか？搬送しないのならば、どう二人を保護すべきかを問われる。
- 3 ハイラインで川を横断。先行した隊員が精神疾患患者により銃で撃たれ受傷、精神疾患患者の対応をしながら、安全を確保しつつ、隊員の救命処置をどのように迅速に行うかが求められる。
- 4 重カダミーをチェアストレッチャーにのせ、障害物を避けての搬送タイムゲーム。その後、45歳女性、嘔気を訴える傷病者と接触12分観察処置して、鑑別診断。
- 5 娘が実家を尋ねたところ祖父が社会死状態。救急処置を継続するが、隊員が倒れ、ガス中毒であることが判明。娘は妊婦、他に幻覚を見ている別の娘あり。
- 6 診療所内で右腕切断患者1名、頭部外傷意識混濁1名、意識なし妊婦1名、全員が意識ない中で迅速な観察、判断、救命処置を求められた。
- 7 3名の患者の観察判断審査、1人2分30秒で3人観察。2分30秒でそれぞれの患者の鑑別診断
- 8 ガーデンパーティーで乱闘、1名ナイフで切創、麻薬使用疑いの女性がCPAに。救命処置を実施。
- 9 自宅分娩新生児、しかし先天性疾患がありCPA。親は尊厳死を希望。かかりつけ医師と連携した適切な対応。

- 10 夜間の低温環境下での山岳救助、2名墜落、共に低体温。加えて両下腿開放性骨折1名、気胸1名、暗闇の中で観察救命処置の実施。
- 11 夜間の路上に車両停車、転倒した自転車、活動性出血ありの酩酊者を発見。交通事故かと思いきや、自転車運転手は低血糖発作、酩酊者は普通に転倒しただけであった。迅速観察処置実施。

メディカルラリーにありがちな奇を衒う想定ではなく、現実的で基本に忠実な活動が求められる想定が多かったのが非常に印象的でした。1点強く感じたことは救急救命士の処置範囲です。日本以外の国々の方は、救急現場では医師と救急救命士の行える処置にそれほど差はないと言います。深く掘り下げ、「現場で手術」となれば差は出てきますが、救急救命士が緊急的に行える処置はとても多いのです。海外の選手から処置範囲について質問された際、「～中略～日本では救急救命士が点滴をするにも自由はない。」と答えると難しい顔をして「それでは命は教えないね。かわいそうに・・・」。私たち5人は世界に飛び出し、打ちのめされ、世界を知り、日本を知りました。これから私たちに何ができるかは模索中ですが、チェコメディカルラリー「Rallye Rejviz」に参加を希望する熱い救急関係者の道案内として活動していこうと強く思っています。いつか、みなさんとチェコへ行ける日を楽しみにしています。

最後に、ある現地スタッフが話していました。「上位を目指し訓練していくことが、人の命を救うことにつながる。」そう信じ、仲間と共に今後も訓練に励みたいと思っています。そして、いつの日かリベンジを。

CBRN 対策の現状と課題・・・大規模イベントと北を見据えて

重松製作所主任研究員 元陸自化学学校副校長

演田 昌彦

【目的】

最近の CBRN の動向、現状と課題を概観して、消防等における現場活動の資とする。特に、検知、防護、除染、救護といった諸活動の中で、オリパラ等の大規模イベントを考えた時に、何が欠けているのか、その要素を明らかにする。併せて、北朝鮮の CBRN 脅威についても付言する。さらに、現場において消防、警察、自衛隊、医療といった各組織の連携が求められる中で、その実効性を上げるために何が必要なのかについても検討を加える。

【事例及び考察内容】

あの地下鉄サリン事件において、最も欠けていたものは何か。それは速やかな COP（認識の共有）の実現ではなかったかと考えている。象徴的な場面として、地下鉄駅のホームを歩く東京消防庁の若い消防士の写真が残っている。空気呼吸器は持っているが、面体は装着していない。何が起きているのかわかっていないのである。それは、福島原発事故の際もうまうまなかったし、現在でも解決されているとは言えない状況にある。しかし、CBRN の難しさは、そのイメージが一般にないことである。ほとんど誰も本物のサリンや VX を見たことがないであろう。また、現場において、CBRN のスイッチをいつ、だれが、どうやって入れるかも課題の一つである。カギとなるのは、例えば神経剤の症状を感覚として知っておくことである。知識としてよりも、映像としてイメージ化しておくことが大事である。ゾーニングやそれぞれの防護レベルについても、様々の議論がある。そのポイントについても触れておきたい。さらに、これらの課題に対して、イスラエルがどのような

アプローチを取っているのかについては興味深い。もちろん、そのまま日本に持ってくることはできないのだが、現場でまず使われたのが神経剤かどうかを判定することや、救急医療チームがレベル 0 で汚染地域に入っていくこと、救急車に自動注射器が常備してあることなどは、参考にしてもいいかもしれない。除染においては、我が国において脱衣の重要性と拭き取りの効果がもっと強調されてもよいと感じている。これだけで、99%の汚染は除去できるとする PRISM のガイドラインを紹介する。ホットゾーン内での治療、排水の処理、脱衣後の衣服の取り扱い、弱者への配慮等、課題は尽きない。さらに、リオオリンピックでの課題と解決方向についても紹介する。

【考察】

大規模イベントにおいては、前述の COP の実現とともに、どんなシナリオを設定して準備するかがポイントとなる。東京オリンピックの CBRN テロ対処計画を考えるベースとなるものである。

大規模災害における小規模消防本部の課題 ～東日本大震災の教訓から～

南那須地区広域行政事務組合消防本部

久保居 俊之、小室 隆広、斎藤 貴志、佐藤 崇幸、小林 臣徳、清水 和行

【はじめに】

2011年3月11日東日本大震災により、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害が発生した。栃木県当消防本部管内でも震度6弱を観測し、家屋倒壊など多くの被害が発生する中、土砂災害で2名の尊い命が犠牲になった。

【目的】

東日本大震災で当消防本部が他機関と連携した事案について、問題点や諸課題を抽出し、切迫する首都直下型地震や南海トラフ地震への対応に寄与する事を目的とする。

【背景】

震源域が広大で広範囲に被害が発生する様な大規模災害時には、より甚大な被害が発生した場所に、緊急消防援助隊などの部隊は参集となる傾向があり、小規模消防本部管内で既存の消防力を超えた局所災害が発生しても、災害急性期には該当消防本部や地域消防団及び所轄の警察など、各自治体における他機関との連携のみで対処しなければならない。

【課題】

①他機関との情報共有方法②他機関への現場指揮③民間業者の介入時期④共通認識下での行動方針など、事後検証会等で振り返りを実施した結果、改善すべき課題が抽出された。【考察】消防機関での広域連携訓練は数多く実施しているが、地域自治体や地域消防団及び所轄警察と、局所災害の対応連携訓練などを実施する機会は少ない。東日本大震災を経験し、局所的な土砂災害などに対応する為には、地域自治体をはじめ管轄消防本部を取り巻く他機関との連携こそ、実情を加味した互いの認識共有に有

意義である。更に、顔の見える関係の構築と地域協力体制を整備していく事が喫緊の課題であり、その重要性が示唆された。

多機関連携の強化～島根メディカルラリー救助ブースを通して～

1) 島根大学医学部附属病院 2) 雲南市消防本部 3) 安来市消防本部 4) 出雲市消防本部 5) 江津邑智消防組合消防本部 6) 益田広域消防 7) 鳥取県東部広域行政管理局消防局 8) 鳥取県東部広域行政管理局消防局 9) 尾道市消防局

日下 あかり¹⁾、細木 慎太郎²⁾、富次 信一³⁾、高砂 佑樹⁴⁾、藤田 剛⁵⁾、
石川 恭平⁶⁾、中村 昭⁷⁾、小河 徹哉⁸⁾、中村 直哉⁹⁾

【目的】

2018 年 10 月第 8 回島根メディカルラリー。県と消防長会の後援、消防学校と県防災航空隊の協力、海上保安部・警察・自衛隊と作り上げるラリーにおいて、特に救助ブースでの多機関連携の強化について考察する。

海上保安部と県警、自衛隊との連携が加わり、多機関連携の強化につながると考えられる。

【対象と方法】

島根メディカルラリーの変遷、関係機関とのかかわり、救助ブースでの狙い・活動などから多機関連携への効果について検討する。

【結果】

島根県では 2009 年に医学部学祭イベントとして消防・学生の有志により発足、2018 年までに合計 8 回開催された。2013 年から県防災航空隊、消防学校の協力、2015 年から県および消防長会の後援、2016 年から海上保安部、2017 年から自衛隊、警察機動隊が加わった。チャレンジャーは医師、看護師、救急救命士、救助隊員（消防学校初任科学生含む）を 1 チームとし、外傷・内因性・災害など模擬現場で、傷病者にいかに迅速で正確な治療ができるか県内 9 市町のチームで競い合う。特に、ラリーでは全国的に珍しいテーマである救助ブースにおいて CSR や災害救助犬を題材として取り上げ、大雨や地震等による実災害をシナリオに取り入れながら、多職種で力を合わせて向き合うことで、県全体の知識・技術の共有・向上を目指している。

【考察】

救助ブースを含む島根メディカルラリーでは、救助・救急・医療の連携、航空隊との連携、

狭隘空間での救助活動における障害物除去活動の検証

長岡市消防本部

高野 悟志

【目的】

日本における震災対応技術は、近年大きく発展し、建物の狭隘空間における救助技術（CSRM）、さらにショアリング、ブリーチング、クリビング、ムービングなど、様々な技術が全国に広まっている。これらの技術の他に震災現場で大きな困難が予想される障害物突破に関して、標準技術として体系化する必要があると考える。

具体的には、CSRMにおける指揮進入活動のほぼ全てで家具が障害物となり、内部進入にはかなりの困難が伴う。倒壊建物内の家具は様々な方向から荷重がかかっており、破壊しなければ除去できない状況になっている。これらのことを考えると障害物除去という活動を「除去が必要かの判断」「除去により二次倒壊を誘発しないかの判断」「破壊除去技術」の各段階に分け、判断要領や技術を体系化する必要がある。

今回の検証は障害物除去の困難性を「見える化」することを目的に実際に狭隘空間に障害物を設置し、破壊除去を行い、その困難性を検証した。

【対象と方法】

NPO RIRO 東京訓練場にて、狭隘空間に木製家具（台所に置かれている木製家具と寝室に置かれている木製家具）を設置し、指揮進入活動を行った。

【結果】

狭隘空間に障害物除去には、通常では簡単に移動できる家具であっても除去に長時間を要することが再確認できた。1 回目はハンマー、のこぎりなど、手動資器材のみで実施した。2 回目は家具の構造についてレクチャーを受け、手動資器材に加え電動工具（マルチツール）を使

用した。2 回目の方が迅速に除去できたが、その差は若干であった。

しかし、大きな違いとしては家具の構造を知り、電動工具を使うことで疲労度は大幅に軽減した。

【考察】

今回の検証では手動工具と電動工具を使用した場合の結果に大きな差はなかった。これは使用した電動工具の使用方法に不慣れだったことや電動工具自体が繊細であり、破壊作業に向いていなかったことも要因として考えられる。小型のチェーンソーなどの活用も考えられるが、キックバックの危険性が高まるなど、電動工具の選定についてはさらなる検証が必要である。しかしながら、家具の構造を知り、使用する資器材選定を的確に行うことで障害物除去に要する時間を短縮できると考える。今回の検証結果をもとに今後も検証を続ける。

車両閉じ込め対応の考察

印西地区消防組合

小島 大輔

【目的】

昨今、モータリゼーションにおける車両内の幼児等の閉じ込め事案が増加しております。救出時の根拠と思われる消防法第 29 条に関連して活動をしていると思われますが、破壊することがすべてではないと感じております。

そこで、その活動に伴う消防側の対応について、今一度検討を重ねる必要があると感じたことが目的です。

【対象と方法】

夏季シーズンにおける車両内部の温度上昇の状況確認と、消防隊が保有している資器材でどのようにすれば温度の上昇を抑えることができるのか。また、消防法第 29 条の破壊活動以外ではどのような活動を行うことが効率的で、住民に対し費用負担を減らせるのかを検討した。

実施内容

- ①車両内部の温度測定
- ②車両に水をかける
- ③ブルーシートで日陰を作る

救出方法

特定の資器材を使用しサイドガラスの隙間から鍵を解錠する手法

【結果】

①車両内部の温度測定

このデータから、最初は緩やかに温度が上昇していくものの、2 分経過する頃からは、1 分あたり 2℃の温度上昇が見られた。

②車両に水をかける。

③ブルーシートで日陰を作る。

この結果から、どちらの検証も車両内部の温度を下げることはできなかったが、温度の上昇

を抑制することができた。

【考察】

夏場の車両内部温度の上昇は著しいものであるため、通報者からの情報は重要で、危険レベルとなる 15 分を超えている場合は、救助隊に限らず、先着隊が窓ガラスを破壊して救出することが最重要である。しかし、閉じ込めから救出開始までの時間が短くても早期救出に変わりはないが、消防法第 29 条を考えた場合、破壊活動以外の特定の資器材を使用した鍵の解錠方法もその一つとして考えられる。

さらなる他機関連携を目指して

法川広域消防本部

小林 靖典

(CSR アドバンスガイド執筆協力 一般社団法人 日本 DMORT)

【目的】

様々な災害において、消防活動も高度化し他機関連について必然的に連携強化が求められ消防機関同士はもちろんのこと警察や自衛隊、医療機関、災害救助犬など救助活動や救護活動については、お互いに必要性を感じ積極的に連携が図られ合同訓練等が行われ顔の見える関係が多く広がり良好な関係が構築されています。

今後、さらなる連携を深めるために「DMORT」との連携の必要性を発表いたします。

【対象】

私は CSR アドバンスガイドを作成する過程で過去の災害で使用された黒タグについて、さらに DMORT について、抜粋ではありますが以下の内容を知りました。そこで今までとは異なった視点で災害を振り返るようになりました。

JR 福知山線脱線事故(2005)の報告で、「黒タグをつけられた犠牲者は1名も医療機関に搬送されず、病院の混乱を防ぐのに役立った」と記載され、また現場で黒タグを使用することで、赤タグの搬送に割り込むことなく救急搬送を効率的に行えたという評価であったが、その後、遺族の診療を担当する心療内科医から黒タグをつけられた遺族は納得しておらず、そのことが診療経過にも影響を及ぼしていることが第11回日本集団災害医学会(2006年2月)で報告された。黒タグの使用が効果的であったと考えていた救急医にとっては衝撃的な報告であった。

黒タグの使用そのものは災害医療の中で妥当な判断と考えられる。ただ、救命医療のみを考えてきた災害医療に、死亡者やその家族(遺族)への医療という視点が抜けていたことも事

実であり、そのために生じた問題と言える。これを契機に DMORT の必要性が指摘されるようになった。

【考察】

このような内容を知り、強く感じたことは、一歩手を伸ばし、DMORT と他機関連携を行うことができれば、さらに本当の意味で人を助ける消防の活動となるのではないのでしょうか。

DMORT を知ることで、心の目を持ち、見えないう傷をいち早く手当をすることができれば災害被害者の身体と心・・・人を救出救護できるのではないかと考えます。